

次回受診までに薬剤師が介入する効果は？

薬剤師中間介入研究「PIIS」の最終報告会が都内で開催

2019/07/10

井田 恭子 = 日経ドラッグインフォメーション

【ケース紹介】 地域住民の健康に関する「困った」を総合的にフォロー



写真A 来局者にOTC薬を薦めるたむら薬局の田村憲胤氏

PIISの最終報告会では、同研究に参加した薬局薬剤師から、実際の介入事例について発表があった。発表者の1人であるたむら薬局（東京都練馬区）の代表取締役の田村憲胤氏は、「地域密着薬局による患者との関わり」と題して講演した。

同薬局は、住宅街が広がる私鉄の駅周辺に4店舗を展開し、地域住民が処方箋がなくても気軽に立ち寄ることのできる薬局づくりを目指してきた。OTC薬やサプリメント、健康補助食品の品ぞろえを充実させ、疾病予防・早期発見・悪化予防にも力を入れる（写真A）。

たむら薬局がPIISに登録したのは、糖尿病や高血圧症、脂質異常症などに加えて、狭心症の既往もある70代の女性患者。病院の複数科を受診し、処方日数も長期であり、薬に対する不安感もあったためだ。良好な血糖コントロールを目指して田村氏がフォローした内容は、例えば、新たに処方されたトルリシティ（一般名デュラグルチド [遺伝子組換え]）の副作用の拾い上げや、その後、変更となったピデュリオン（エキセナチド）の注射手技の指導、健康補助食品の活用なども含めた食事・栄養指導など、多岐にわたる。患者の様子から認知症を疑い、神経内科受診にもつなげた。

中間介入の手段も、電話だけでなく、本人が体調不良であれば、様子を見るため自宅を訪問することもある。処方を一元管理しているため、他科受診の帰りに患者が処方箋を持って立ち寄ったり、OTC薬や健康補助食品を購入しに来局した際に体調の変化を確認するなど、患者に介入する機会が多い。

上記の患者には現在も継続して関わっているが、「処方箋に限らず、地域住民が健康な生活を送っていく上で『困った』と感じたことを総合的にフォローすることが、地域に密着した薬局の使命だ」と田村氏は話している。